



#### ARNIS (アーニス)

1、2本の丸棒、木製ナイフを使う。試合では、籐製の丸棒を使い、ヘッドギア、太もも、胴体や両腕などを叩いたり、突いたりする。相手の身体を先に打ち付けた攻撃の数で勝敗を決めるのが一般的だ。モダン・アーニスやカリス・イラストリシモ、ドセパレスなどの流派がある。

# フィリピン伝統武術アーニス 伝説の勇者を追う

【文】澤田公伸 【写真】大久保豊

長い棒を巧みに使うフィリピン伝統の武術アーニス。機敏に足を動かし、丸棒を素早く相手の身体に打ち付ける迫力ある武術である。

その歴史は古く、スペイン人の到来以前から原住民の首長や貴族らが発達させてきた剣術に源流があるとする説が有力だ。16世紀後半、スペインによる植民統治が始まった後も、フィリピン各地で原住民の反乱が相次いだため、スペイン政府は住民がボロ(蛮刀、鉞)で武装したり、剣術を練習したりすることを禁じた。そのため住民たちは刃物ではなく棒を使って武術の鍛錬にいきしんだのが、現在のアーニスにつながっているという。

第二次世界大戦中、日本軍に占領された際、比米ゲリラ部隊が各地で抵抗運動を繰り広げたが、特にボロで武装したフィリピン人ゲリラの勇猛さは有名だった。米軍も在米フィリピン人からなる白兵戦部隊を結成し、フィリピンのジャングルに送り込んだといわれている。20世紀初頭に米国支配下に置かれた時、米国のハワイやカリフォルニアなどに渡った比人出稼ぎ労働者も、過酷な農園労働のかたわら、アーニスを学び継承していったという話が



1 フィリピンの民族舞踊の中には、鎧や楯などをかたどった衣装を身に着け、武術を彷彿させるものが多い

2 ラタン製のバストーン（棒）を構えたマスター。武具の多くはラタン（籐）や竹、木材を素材としており、表面に装飾を施したものも珍しくない

3 研磨前の木製短剣。ニスで仕上げし、フィリピンだけでなく海外にも出荷される。アーニスの団体によっては武具の製造・販売もしている



2

3

伝わっている。白兵戦部隊にもアーニスの使い手がいただろう。

そして戦後、ネグロス島出身のアーニス師範だったレミー・プレサスが、当時のマルコス政権に接近し、国内の体育教育の一環としてアーニスを授業科目に取り入れることに成功、アーニスの普及に大いに寄与したという。現在は、警察官、軍隊、海外で働くフィリピン人船員たちが護身術として習うほか、家政婦として海外に出稼ぎに行く女性に対して、政府が事前セミナーで教え始めるほど裾野が広がっている。アーニスはこれまで以上にその価値が見直されつつある。

### マスター直伝の奥義

首都マニラのランドマークであるルネタ公園（リサール公園）は、アーニスの青空道場ともいえる場所だ。毎週日曜日になると、ここにアーニスを練習する愛好者たちが集まってくる。公園を訪れてみると、赤い柔道着のような練習着に身を包んだ者や、ジャージにTシャツといったラフな格好の人たちが「バストーン」と呼ばれる長さ50〜70センチほどのラタン製の細

い丸棒や、「ダガ」と呼ばれる木製のナイフを使い、独特の間合いでスピード感あふれる打ち合いをしていた。参加する人たちも様々で、医師や実業家、大使館職員などの中・上流階級の人もいれば、警官や学生、船員など職業も多岐にわたり、イタリアや米国、日本などから来た外国人の姿もちらほら見られる。米国で70年代に武術家である映画俳優だったブルース・リーのカン

種のプロムになったこともある。アーニスは、海外でも結構ファンがいる。米国でブルース・リーにアーニスを手ほどきしたフィリピン系米国人の武術家ダン・イノサントは、同じくフィリピンから米国に移住してきた武術家などからアーニスを直接学んだほか、各国の伝統武術を学び、その技も取り入れて独自の流派を打ち立てている。このようにアーニスには多くの流派がある。柔道や空手のように主要な団体が組織化されているのとは違い、「マスター」や「ランドマスター」と呼ばれる師範が自分たちの流儀を少数数の生徒に直接手ほどきするのだ。ルネタ公園でも、モダン・アーニスやカリス・イラストリシモと呼ばれる

流派のグループが、師範ごとに別々の場所で練習を行っている。つまり、アーニスは、一人一流派とも言える柔軟で多様なスタイルを生み出してきた。

### 伝説の武術家・アントニオ

多くのマスターがいる中で、特に伝説的なランドマスターとして知られた、アントニオ・イラストリシモ（1900〜97年）という武術家がい

た。私は彼に興味を覚えた。いったいどんな人物だったのだろうか。彼の弟子で現在カリス・イラストリシモの代表を務めるA・ディエゴらの著作によると、アントニオ・イラストリシモは、ビサヤ地方のある武術一家に生まれ、自分の一族に伝わるアーニスをマスターした後、周辺のビサヤ地方の島々やミンダナオ地方まで武者修行に出たという。当時は各地でアーニスの使い手同士が技を競い合い、果し合いをすることもよくあった。しかも、アントニオは、ただのマスターではなかったそうだ。「オラシオン」と呼ばれる呪術の力を信じており、「アンティンアンティン」と呼ばれる護符の文様を刺青として体に刻み込ん

でいた。真つ向から戦っては勝てないと思つた相手が飛び道具を使つてきても、彼がオラシオンを唱えようと、瞬時に透明の壁が彼の体の周りを取り囲み、攻撃から身を守ることができたという逸話がまことしやかに伝わっている。彼は戦後、マニラに出てきて荷役人夫や船員の仕事をしながら、アーニスをルネタ公園などで教え始めた。その後、A・ディエゴやY・ロモなど彼の高弟たちが、師匠の教えを研究して体系的にまとめ、カリス・イラストリシモ流派を打ち立てた。変幻自在で、相手の攻撃に合わせて反撃するスタイルといわれたアントニオの技が、こうして次の世代に伝わることになった。

### アーニスの源流を求めてセブへ

マニラでアーニス師範たちと交流するうちに、ビサヤ地方中部のセブ島とバンタヤン島に伝統武術の源流の一つがあるように思われてきた。あの伝説の武術家アントニオ・イラストリシモの一族もそこを拠点にしており、マニラにいるアーニス師範たちの多くもこの地方出身だ。ビサヤ地方といえ

1 アントニオ・イラストリシモからかつて習った護身術を披露するバンタヤン島の古老。杖も武器がわりに使えるという

2 セブ島に隣接するマクタン島のセブ国際空港から車で20分ほどのマクタン霊廟には、1521年にスペイン艦隊を率いて到来し、ラブラブの部隊と交戦して死んだマゼランの記念碑がある。マゼランが倒れた場所に立っているという

3 マクタン霊廟では、毎年4月27日に史実とおりマゼラン部隊とラブラブたちが浜辺で合戦する様子を再現する祭りを開催しており、多くの観光客が集まる

4 マクタン霊廟には、マゼランを倒したラブラブ像もある。左手に盾を構え、右手に幅広い剣を握って、今にも眼前の砂浜に押し寄せるスペイン兵を迎え撃とうというような勇壮な姿だ



世界一周の航海途中だったマゼランが、ラブラブたちとの戦闘で殺されたという有名な史実もある。勇猛果敢な武術家たちを生んだ土地に違いない。そこで8月のある日、私はセブ地方へと向かった。

マニラから南方580キロに位置し、飛行機で1時間ほどのセブ国際空港に到着すると、私は早速、アーニス研究家でもあるサウス・ウエスタン大学のネパング博士を訪ねた。

もともとセブ島北部の海岸地帯やバンタヤン島などは、17〜19世紀にかけてイスラム教徒による襲撃が激しかった地域だという。スペインの支配下に入ることを拒んだミンダナオ地方のイスラム教徒たちが、カトリック信仰を受け入れた漁村を襲い、村人たちを奴隷として連れ去った。その攻撃から村を守るため、カトリック教徒の漁師たちがボロなどによる武術を鍛錬したことが、アーニスの流れにつながった。博士はそう説明してくれた。

確かに「バンタヤン」という単語もフィリピン語で「敵の攻撃などから守る、見張る」という意味だ。アーニスの原型ともいえる武術の使い手たちが、スペイン人やイスラム教徒などの

攻撃から一族を守り続けてきた歴史の一面が浮かび上がる。

#### バンタヤン島で古老と出会う

翌日、私はセブ市内のバスターミナルから長距離バスで北上し、バンタヤン島に向かった。2時間半ほどバスに揺られて港町のハグナヤへ行き、そこからはフェリーボートに乗った。8月のこの辺りの海は波が高く、欠航することも多いと聞いていたが、この日の航海は順調だった。

4 出航して1時間ほどで、エメラルドグリーン色の海と白浜に縁取られた平らなバンタヤン島が見えてきた。サンタフェ町にフェリーが到着し、早速、自

転車にサイドカーを付けた乗り物で町の中心部に向かった。車はまったく見かけない、静かな島だ。学校帰りの小学生たちをゆつくり追い越して、時が止まったような町の中心部にある市場に着いた。アントニオ・イラストリ

シモのことを知っていたような人はいないかと訪ね歩くと、ラッキーなことに、アントニオを知るといって94歳の古老、シンポールさんに出会った。彼の話からアントニオの人となりがよくわかった。バンタヤン島からさらにボートで1時間以上荒波を渡ったところにある辺境の小島がアントニオやこの古老の故郷だったこと、お互い漁師で漁に出て足腰を鍛えたこと、夕方や月夜になると自宅の裏庭でアントニ

オからアーニスの手ほどきを受けたこと、武者修行に出かけたアントニオが、ネグロス島のある村で村人全員から襲われた時、指一本触れさせずに退散させたこと、長身の偉丈夫だったため女性によくもてたこと……

「アントニオは暴れん坊で酔ったり怒ったりしたら手が付けられなかった」と、マニラの直弟子も言っていたが、この古老の話からも、アントニオのカリスマ性を備えた武術家としての姿だけでなく、乱暴者でありながらどこか憎めない人物像が浮かび上がってきた。

「アントニオの技は、どんな足運びだったのですか？」と、私が聞いた時だった。この古老はいきなり立ち上がり、体に染み込んでいるとでもいうような素早い足の運びをして見せてくれた。もちろん片手には棒に見立てた杖をしっかりと握り締めていた。古老は華麗なステップと棒の旋回を見せながら、一瞬、私に鋭い視線を向けた。「大切なことは、けっして後ろに引かないことだ」

その時、私の目に映ったのは、古老ではなく、アントニオをはじめとするアーニスの武者の姿だった。■

